

## 平成二十七年年度富山県立大学入学式式辞

平成二十七年四月六日（月）

アイザック 小杉文化ホール ラポール

三百二十一名の新入生の皆さん、そして、ご家族の皆様、ご入学おめでとうございます。本日、寺林富山県副知事をはじめ多くのご来賓の皆様とともに、このように盛大に入学式を挙げることは、私たち教職員にとっては大変な喜びであり、心から皆さんのご入学を歓迎いたします。

私からは、大学で学ぶにあたっての心構えなどについてお話をいたします。ご家族の皆様にもご理解とご協力をいただければ幸いに存じます。

まず、学部新入生の皆さんにお話しします。

皆さんは、高い競争倍率の本学入学試験に見事合格し、めでたく本日の入学式を迎えられました。こうして選ばれた皆さんは、自ら研鑽に励み、地域、そして我が国の発展を担う人財として立派に成長し、社会に貢献することが期待されています。

皆さんを迎える本学は、人間性豊かで創造力を備え、社会に貢献する人財を育成し、また学術と産業との有機的連携を進め、もって地域及び社会の発展に貢献することを目的に設立された、創設から26年目のまだ若い大学です。工学の知識だけでなく、それを生かす上で必要となる高い知性や人間性を備えた優れた技術者（エンジニア）や研究者（リサーチャー）を育てることを基本的理念としています。1学年定員230名、全学でも1200名という比較的小規模な工学系単科大学ですが、工学部5学科・大学院5専攻を有し、富山県の知の拠点となるべく、地域の課題やニーズに的確に応えるとともに、優れて世界的な研究も展開しており、併せて学生の能力を大きく伸ばす行き届いた教育を行っています。こうしたことにより本学が「地域に貢献する大学」や「就職に強い大学」として高い評価を受けていることは、皆さんよくご存知のことと思います。

ここで、私から皆さんに紹介したい言葉があります。それは、本学藤井澄二初代学長が記念すべき第1回入学式で述べた言葉の一節です。初代学長は、こう述べています。

「本学が学術研究によって社会や産業の発展に大きく寄与し、日本国内はもちろん、国際的にも高い水準の大学として認められるものとなるよう最善の努力を払うとともに、学生諸君に濃密かつ特色ある教育を行い、諸君が大学で学

んだことを終生誇りとし、また満足感をもって回顧することのできるような大学にしたい」というものです。開学当時の熱い意気込みが伝わってきます。

これは、開学以来 25 年を経過し、公立大学法人へと移行した今でも、私が皆さんに申し上げたい言葉そのものです。違うのは、当時は、この言葉が意気込みや期待感にすぎなかったものが、歴代の知事、県議会や県民の方々、経済界の方々、教職員等々、多くの皆様のおかげで、着々と教育、研究、地域貢献で実績が積み上げられた結果、本日、私は自信を持って、皆さんに同じ言葉を贈ることができるということです。

皆さんは、優れたエンジニア、あるいはリサーチャーになることを志して本学に入学されたことと思います。その初心を決して忘れないでください。

皆さんはその志の実現のために、これから、本学において、勉学に励むことになりませんが、覚えておいてほしいことがあります。

まず、第一は、毎日の学習という一步一步のたゆまぬ努力が必要だということです。大学では、「試験前の一夜漬け」などは通用しません。実際、国が定める大学設置基準では、皆さんが、一科目の単位を修得するためには、実際の講義時間に加え、その二倍の時間に相当する自宅等での関連学習を必要である、としていることを覚えておいてください。

こうした地道な努力により、講義の狙いを的確に把握し、体系的にものごとを捉え、より具体的な課題を認識することができるようになり、また、その過程で獲得された知識が集積され、さらに、クリティカル・シンキング (critical thinking=批判的思考) する力が養われると思います。

このような皆さんの努力に応えるため、本学では、数々の行き届いた教育を実践しています。

例えば、1 年次の対話型の教養ゼミに始まり、4 年次の卒業研究に至るまで、すべての学年で少人数の学生と教員とが触れ合う場を用意しています。さらに、全学年を通して、環境リテラシーを育む環境教育プログラム、そして学生の自立を促すキャリア教育を実施しています。

また、本学では、平成二十五年度から C O C (Center of Community) 教育研究プログラムを実施しています。これは、文部科学省が推進している「地(知)の拠点整備事業」に、全国六倍の競争率の中、採択されたプログラムです。本学では、「『工学心』で地域とつながる『地域協働型大学』の構築」を目指し、地域産業の振興や超高齢化社会への対応などの課題について、企業や自治体など地域関係者と連携し学生が自ら主体性をもって具体的な課題を見出し、その解決にむけて努力するという授業に取り組んでいます。

このような場や体系化されたプログラムにより、専門知識だけでなく、それを活用するのに必要となる広い視野やコミュニケーション能力、正解のない問題に取り組んで行く力と使命感などが養われるものと考えています。

第二として、私が特に強調したいのは、本学は、地域貢献を柱とする県民の大学ですが、けっして内向き（ドメスティック）に陥るのではなく、グローバル人材の育成にも力を入れていることです。

4年前から中国瀋陽化工大学に毎年10名近くの学生が夏休みに短期留学していますし、昨年度は、ドイツの大学にも学生3名を派遣しました。また、生物工学科3年生の松村末利子（まりこ）さんが文部科学省の官民協働海外留学支援制度（トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム）の第一期生に選ばれ、1年間、オランダに留学しています。さらに、今年2月から始めた米国オレゴン州のポートランド州立大学での語学研修には、38名もの学生が参加しました。皆さんにも、是非このような機会を積極的に利用して、語学力と広い視野を養っていただきたいと思います。

第三は、学業の場はもちろん、サークル活動やNPO活動など正課外のさまざまな活動を通じて、積極的に同級生や先輩、教職員、さらには地域の人々と親しく交わることが大切だということです。

大学生活においては、同じ目標を持つ多くの学友と生活を共にしたり、教職員と触れ合う機会も多いと思います。また、逆に意見の異なる人といろんな協議や折衝を行って、自分の考えを理解してもらったり、逆に自分の考えを整理し直したりすることもあるかと思います。このような他人との交流は皆さんの大学生活を豊かで充実したものにしてくれるばかりでなく、皆さんを人間的にも成長させてくれることと思います。

次に、大学院工学研究科新生の皆さんにお話します。

皆さんのうちのほとんどが、本学で学部生活を送ってきたと思います。どうか、学部新生、そして在学生の模範となるような学習・研究態度で、キャンパス内をリードしていただきたいと思います。

特に、先日の学位記授与式でも申し上げましたが、国際性を備えることに努力して欲しいと思います。私は、研究成果を出した大学院生については、可能な限り、国際学会に参加させ、英語で発表する機会を与えるよう、全教員にお願いしています。体験を通してより高い国際感覚を身に付けるチャンスです。皆さんには、このような絶好の機会を逃さないようにしていただきたいと思います。

そして、皆さん全員にお話します。

かつて、わが国は、世界に誇る高度な科学・技術立国として発展しましたが、たいへん残念なことに、最近20年間について、「失われた20年」といった言われ方も聞かれます。事実、技術開発を他国に譲ることが多くなっています。しかし、我が国にはまだまだ底力があると思います。我が国が、新しい時代の

技術立国として名を馳せることは可能だと思います。

そのためには、何よりも新しい技術の創造に熱意を持つ皆さんのような多くの若者の力が必要となります。皆さんには、本学において「好奇心」を持って勉学に励み、社会に貢献できるエンジニアやリサーチャーとして立派に成長し、その一翼を担っていただきたいと強く念願します。

皆さんの前途にはたくさんのやりがいのある仕事があります。皆さんの将来には明るいものがあります。

初心を忘れず、将来優れたエンジニアやリサーチャーとして社会に積極的に貢献するという夢や志を持って、これからの大学生活を有意義に送られることを、心から祈念し、式辞といたします。

平成27年4月6日

富山県立大学 学長 石塚 勝